

お知らせ

愛媛大学医学部附属病院では、医学・医療の発展のために様々な研究を行っています。その中で今回示します以下の研究では、患者さんのカルテの記録や画像情報に加え、手術で摘出した腫瘍組織を使用します。この研究の内容を詳しく知りたい方や、カルテや保管されている画像情報および摘出腫瘍組織を利用することをご了解いただけない方は、下記【お問い合わせ先】までご連絡下さい。

【研究課題名】

中枢神経原性悪性リンパ腫の診断におけるフローサイトメトリーの有用性に関する観察研究

【研究機関】 愛媛大学医学部附属病院

【研究機関の長】 杉山隆（病院長）

【研究責任者】 井上明宏（愛媛大学医学部附属病院 脳神経外科 講師）

【研究の目的】

中枢神経系原発悪性リンパ腫（以下、脳悪性リンパ腫）の標準治療は、化学療法に引き続き全脳照射を行うことですが、最近では分子標的治療薬や、大量化学療法併用の自家末梢血幹細胞移植の有用性も報告され、その治療方法は多岐に渡っています。一方で、この病気における手術の目的は、生検手術により組織診断を確定することであり、疑いのある患者さんには手術を早急に行う必要性があるのですが、典型的な所見を呈さない場合も存在し、時に他の病気との鑑別に苦慮することもあります。このような場合には、術中の迅速病理診断が極めて重要となり、迅速病理診断で確定すればその時点で手術は終了となりますが、その他の悪性腫瘍と診断された場合には可能な限りの摘出を目指した追加切除が必要になるため、術中の迅速病理診断は本疾患において極めて重要なウエイトを占めています。さらに、この腫瘍は増大速度が極めて高い腫瘍であり、治療までの期間を出来るだけ短くする努力が必要になりますが、生検手術の場合は診断に十分な検体が得られないことも多く、最終的な結果が確定するまで化学療法を用いた治療を控えないといけけないのが実情です。一方で、脳悪性リンパ腫の病理組織型は大部分がびまん性大型 B 細胞性リンパ腫であるため、術中迅速診断に免疫組織診断を併用すれば、生検手術の診断精度を向上させることだけでな

く、手術時間の短縮に加え不要な摘出を防ぐことが出来るのではないかと考えました。そこで、我々は2021年1月から術中迅速免疫組織診断を導入しておりますが、現在のところ、生検手術時における迅速診断の的中率は100%であり、免疫組織染色の導入は極めて有用な手法であると考えていますが、やはり最終の確定診断ではないため、偽陽性である可能性も常に付きまっています。そこで、可能な限り偽陽性を減らす手段として、我々は、既に一般化された手法であるフローサイトメトリーに着目しました。術中に迅速免疫組織染色と並行して、フローサイトメトリーを行うことで、迅速組織診断における偽陽性を減らすことは十分に可能であると考えており、生検手術後の化学療法開始に要する時間が飛躍的に短縮されると思っています。そこで、当院において治療を施行した脳悪性リンパ腫患者さんの摘出腫瘍組織をフローサイトメトリーを用いて評価し解析することで本仮説を検討したいと考えています。

【研究の方法】

(対象となる患者さん) 2021年1月から2025年3月に愛媛大学医学部附属病院を受診された方のうち脳悪性リンパ腫と診断された患者さん

(利用する手術摘出組織情報) 通常の診療手術で取得した術中腫瘍組織を用いて解析致します。

【個人情報の取り扱い】

収集した試料・情報は名前、住所など患者さんを直接特定できる情報を削除いたします。そのため個人を特定できるような情報が外に漏れることはありません。また、研究結果は学術雑誌や学会等で発表される予定ですが、発表内容に個人を特定できる情報は一切含まれません。

<試料・情報の管理責任者>

愛媛大学医学部附属病院 脳神経外科 講師 氏名 井上 明宏

さらに詳しい本研究の内容をお知りになりたい場合は、【お問い合わせ先】までご連絡ください。他の患者さんの個人情報の保護、および、知的財産の保護等に支障がない範囲でお答えいたします。

【お問い合わせ先】

愛媛大学大学院 医学系研究科 脳神経外科学 講師 井上明宏
791-0295 愛媛県東温市志津川 454
Tel: 089-960-5338